

19世紀末葉朝鮮北東部地域の社会秩序

——咸鏡道洪原県の儒士・武士・富民——

山内民博

はじめに

この小論では朝鮮の北東部、咸鏡道において在地有力者層が形成していた社会秩序の性格について、19世紀末葉に焦点をあてて検討してみたい。

筆者は先に咸鏡道（咸鏡南道）端川郡の建陽元年（1896）の新式戸籍を分析したことがあるが、そこでは他道にくらべ、戸主の職業として「儒」の占める比率の高い点が注目された（山内2012）。1896年以降に作成された、いわゆる新式戸籍では、首都漢城の戸籍を別にする戸主の職業のほとんどを「農」が占める地域が多いのに対し、端川郡では「儒」が48.8%に達するのである（「農」は46.7%）。「儒」は儒生・儒士を自認する者の称とみられ、戸主が「儒」と「農」に二分されている状況は、社会的な階層差の存在を予想させるものでもある。しかし、残念ながら、端川に即して「儒」の性格やかれらの形成していた社会秩序をうかがうことのできる史料はとぼしい。そこで、ここでは端川に近く、比較的良質な史料が残り、19世紀末に「儒」の活発な活動が認められる洪原県を事例としてとりあげることにしたい。

さて、咸鏡道は高麗時代末から朝鮮時代初期にかけて朝鮮の領域に編入されていった辺境であり、「弓馬の郷」として政策的に「武」が重んじられる一方で、官僚の登用では冷遇され、また、19世紀後半以降には領域外、豆満江対岸への移民・流民が顕著になるなど、朝鮮のなかでも独特な容貌をみせる地域である。19世紀の咸鏡道の地方社会に関しては早くに田川孝三の研究がある（田川1944）。田川は咸鏡道の農村社会の階級構成について「所謂、両班・常民・賤民」に大別されるなど「一般的には他道と全く異」ならないものの、「両班」は他地域にくらべると劣勢であり、科挙に及第して官僚となる者の稀な「土班・郷族・郷人」とよばれる存在だったと指摘する。その上で、「当初武を誇った此の地方両班に漸次武業を賤視する風が生じ」、文を重んじる尚文の風が強まっていくという見通しを示した（田川1944：420-422）^{（1）}。

近年、こうした咸鏡道における「文風」の隆盛があらためて注目されるようになった。17世紀末、咸鏡道に置かれた親騎衛は道内「武士」層が武官職をえる重要な経路となっていた

（1）その後、田川は朝鮮時代郷村社会の士族の秩序を追求するなかで、咸鏡道の郷規・郷案についてもとりあげている（田川1972, 1975a, 1975b, 1976）。

が、姜錫和はこの親騎衛が次第に形骸化する一方で、18世紀後半から19世紀、「文士」・「儒生」が書院・祠宇の建立、各種顕彰事業などをつうじ、自身の位相を高めていく様相を明らかにした（姜錫和2000：第3章）。また、姜大敏は18世紀中葉以降設立されていく咸鏡道各地の養士斎をとりあげ、咸鏡道の「郷儒」たちが社会的・政治的身分を維持しようと、養士斎設立に協力し、また養士斎をつうじて科挙をめざす動きを検討している（姜大敏2018：第3章）。

先に述べた端川戸籍の「儒」も、このような19世紀に活発な姿を示す咸鏡道の文士・儒生・郷儒につながるものであることが予想される。とはいえ、これまでの研究が中央政府編纂の史料を中心に進められたこともあり、武士と儒士（文士・儒生）との相互の関係であったり、かれらの形成していた秩序の具体相については、不明なところが多い。また、19世紀には咸鏡道での飢饉に際し賑恤のため「富民」が財産を抛出し、恩賞として官職をえている例が史料に散見される⁽²⁾。いわゆる新興の富民層とみられるが⁽³⁾、前述したように士族・両班の層の薄い咸鏡道にあって「富民」が地方社会の秩序のなかでどのように遇されていたのか、武士・儒士とどう関係するのかという点も、視野に入れる必要がある。

幸いなことに、洪原県に関しては19世紀末葉、高宗30年（1893）9月から翌年7月までの地に流配されていた朴始淳という人物が記した『北征日記』という日記があり、甲午改革直前の時期の洪原県に生きた人びとの姿を伝えている。また、その『北征日記』にも登場する朴寅和という洪原の儒者は『洪城誌』という洪原の大部の邑誌（郡県誌）をのこしている。20世紀初めの編纂とみられ、整った記述ではないが、非常に豊富な情報を含んでいる⁽⁴⁾。

以下、このふたつの史料を中心に19世紀末葉の洪原の社会秩序を、「儒士」・「武士」・「富民」に注目しながら探ってみることにしよう。

(2) 一例をあげると、純祖23年（1823）2月には、咸鏡道觀察使から報告のあった「各邑富民で錢穀を抛出し饑民に分給した者のうち、各穀五十石、錢一百両以上」を抛出した「前別將趙顯牧」・「將校崔東元」ら8名について、官職など恩賞をあたえることが決定されている（『承政院日記』純祖23年2月13日癸丑、1823年）。

(3) 朝鮮時代後期の郷村社会變動を追求した金仁杰（2017）の焦点のひとつがこうした富民層であり、個別研究を一例あげれば、全昊穆（2002）が19世紀前半に全羅道求礼へ移来・定着し地位上昇を図った饒戸富民の事例を検討している。

(4) 国立中央図書館蔵、6冊、写本。従来、この『洪城誌』は編者未詳とされてきた。1928年に洪原郡郷校が刊行した『洪原郡誌』の序・跋には、朴寅和の輯成した6編をもとに『洪原郡誌』を編纂したとあり、『洪城誌』と『洪原郡誌』の内容を比較すると、後者の記述の多くは『洪城誌』の記事をまとめたものになっている。したがって『洪原郡誌』がもとにした朴寅和輯成の6編が『洪城誌』6冊であると考えてよい。編纂時期については、洪原の歴代守令の名簿である「官案」の末尾が甲辰（1904年）9月到任の曹斗煥で終わっており（『洪城誌』六、官案）、1908年の編とみられる『法規類編』からの引用もあることからみて（『洪城誌』三、進貢）、1908年ころにかけて書かれたものと推定される。

1 洪原県の社会秩序と儒士

咸鏡道洪原県は咸鏡道の監營（觀察使營）がある咸興府の東隣に位置し、哲宗10年（1859）編纂の邑誌『洪原県誌』には戸数4,034戸、人口は男12,496人、女13,125人とある⁽⁵⁾。

『北征日記』を記した朴始淳が、この洪原県に流配されたのは前述したように高宗30年（1893）癸巳9月のことであった（以下、月日はすべて陰暦）。かれの本貫は咸陽、憲宗13年（1847）の生まれで、高宗16年（1879）の文科に及第して諸職を歴任した⁽⁶⁾。高宗30年7月、王命の出納にあずかる承政院の右副承旨の職（正三品職）にあったとき、国王ないし王妃閔妃の怒りを買って失脚し、洪原に流されることになった⁽⁷⁾。『北征日記』には高宗30年7月のかれの失脚にはじまり翌年7月、開化派政権の成立後に赦されて漢城に戻るまでの記事が収録されており、その大半は洪原の人士たちとの交遊が占める。配地での生活は束縛はゆるく、科挙（文科）に及第し中央の高官であったかれのもとには、ほぼ毎日、洪原のさまざまな人びとが訪れ、また、ときに誘われて各種行事に参加し、景勝地に遊んだ。以下、まず、『北征日記』（以下、『日記』）の記事から、19世紀末葉の洪原県の社会秩序を探ってみよう。

『日記』のなかで朴始淳は来訪者に対し「来問」と「来見」というふたつの表現を使っている。

9月23日、朴始淳は洪原県に到着すると官門外の李昌奉の家に入り、しばらくそこを居所としたが、その到着当日、「戸長金在洙・副吏房李寅性・官庁色吏崔義煥・刑吏李鍾元」がかれを「来問」している（『日記』癸巳9月23日）。戸長・副吏房などはいずれも郷吏の役職である。洪原県の統治機構はほかの地域と同様に、中央から派遣されてくる県監のもと、県監を補佐し郷吏を統制する郷任、統治実務を担当する郷吏（衙前）、郷吏の下で各種雑務を担う使令・通引・官奴・官婢などの官属、警察的業務にあたる武任（将校・軍校）がいた⁽⁸⁾。

郷吏は、翌日以降も所在の確認のためか、ほとんど毎日のように「来問」している。9月24日の例では前日の4人のうちの3人、「金吏在洙・李吏寅性・崔吏義煥」が「来問」した。

(5) 国立中央図書館蔵『閔北誌』所収。

(6) 朴始淳の経歴については、『韓末官人朴始淳日記』（韓国精神文化研究院、1999年）の解題「韓末官人朴始淳日記の内容と性格」に詳しい。

(7) 流配にいたる経緯はつぎのようなものであった。高宗30年7月6日、前正言安孝済が高宗妃閔妃の寵愛を受けていた巫女鎮靈君（真靈君）の排斥を求める上疏を提出したが、承政院で却けられ、まもなく安孝済は全羅道の楸子島に流された。このとき朴始淳は上疏の国王への捧入（とりつぎ）を主張したようで、即座に右副承旨を解任され、8月末に洪原への流配が決定した（『北征日記』癸巳7月6日、8月19日、27日、29日、『梅泉野録』巻一、甲午以前下、（癸巳）秋七月、前正言安孝済上疏）。

(8) 『洪原県誌』官職条にはつぎのように、郷任、武任、郷吏・官属などの人数があげられている。

座首一人、郷所二人、軍官四人、小中軍一人、千総一人、把総一人、哨官七人、執事七人、執事二人、討捕行首一人、兵房一人、捕校十人、衙前三十四人、知印十人、官奴十七名、婢子八名、軍牢十五名、使令十五名、親騎衛一百六十九人

『日記』ではこの例のように姓と名の間にその人物が帯びていた官職・地位などを略記していることも多い。「吏」は郷吏を意味する。郷吏のほか、雑務を担う使令も頻繁に「來問」しているが、郷吏の上に立つ郷任には「本邑留郷姜錫律來見」といったように「來見」という表現を用いている（『日記』9月24日）。郷任は留郷所・郷所ともよばれ、役職名としては座首・別監などがある。「留郷姜錫律」は「姜座首錫律」という表記でもあらわれ、この時期の洪原の郷任の首座であった。郷任は、元來、在地の品官士族から選ばれたが、17世紀以降しだいに有力士族は郷任への就任を避けはじめ、新興層が郷任に進出するようになる⁽⁹⁾。この時期の洪原に即して郷任の性格を論じるのはむずかしいが、朴始淳にとって郷任と郷吏・使令とは明らかに性格の異なる存在だったのであろう。

郷任のほか、「來見」が使われる来訪者としては、たとえば「姜正言履浩」・「林都正光洙」のように官職名の記された者、「李進士鳳在」のように進士の称号をつけて記されている者、そして「朴儒是柱」・「李儒容燁」のような「儒」と記された者がおもなところである。

「姜正言履浩」（姜履浩）は洪原では数少ない科挙の文科及第者で、県監・司憲府掌令などを歴任した人物であった⁽¹⁰⁾。「林都正光洙」（林光洙）はかつて敦寧府都正（正三品職）に任じられていたことを『承政院日記』で確認でき⁽¹¹⁾、癸巳年の12月から朴始淳はこの林光洙の家を居所としている（『日記』癸巳12月12日）。「李進士鳳在」（李鳳在）は丙子式年（高宗13年、1876）に進士となっている⁽¹²⁾。「朴儒是柱」（朴是柱）・「李儒容燁」（李容燁）といった「儒」は官職や進士などの称号をもたない儒生をさすようである。朴寅和の『洪城誌』では儒生と同じ意味で「儒士」という表現も使われている⁽¹³⁾。

こうした人びとは洪原の在地有力者であることが予想される⁽¹⁴⁾。『日記』や『洪城誌』に「士族」の用例はないが、「姜正言履浩」のような科挙の及第者であれば「士族」といって差しつかえない。朴始淳がかれらの来訪について『日記』に「來見」と表記して、郷吏・使令の「來問」と区別しているのも、訪問の目的自体違っていたではあろうが、文科及第者・官職経験者であるかれ自身に準じる階層として遇していたことのあらわれだと思われる。

かれらのような儒士の活動の場として『日記』にめだつのが、南山齋・晩成齋といった「齋」

(9) この問題についてくわしくは金仁杰（2017）などの研究があり、咸鏡道の状況については田川孝三が概略を述べている（田川1944：421-422）。

(10) 『洪城誌』六、桂籍。

(11) 『承政院日記』高宗25年6月14日甲午。

(12) 『洪城誌』六、蓮社。朝鮮の「進士」とは科挙の小科（生員科・進士科）のうち進士科の及第者をいう。進士・生員となれば太学である成均館に入学できた。

(13) 『洪城誌』六、武班。

武士不可不養不勸也。……与儒士等而出入不殊視、但属訓練、而不属校院。

(14) 前註と同じ『洪城誌』武班条には武士と儒士を対比しつつ「武もまた郷族である」とあって、「郷族」という表現も登場する。

である。

癸巳年12月6日、朴始淳は林光洙の案内で邑城の東にあった南山齋を訪ね、齋儒にあいさつをしている。南山齋では齋生が居接（寄宿）して、春に功令（科文）の、冬に經学の会をもった。朴始淳が訪ねたこの日は經学会がおわり、齋生が齋を離れる日であった。齋に入ると、講長の金道薦基勉が師席に座し、崔初試庸煥・洪道薦大厚ら12人が講長に次ぎ、齋生として金儒王振・張儒元涉など13人がいた。講長の金道薦基勉は学行によって咸鏡道觀察使の道薦にあげられた人物で、『洪城誌』の儒学条にも名が立てられている。講長に次ぐ教師格の人びとにも、崔初試庸煥のような初試（地方で実施される科挙の初試及第者）、洪道薦大厚のような道薦がいた。洪原の名のある儒者が教えていたのであろう。齋儒・齋生には「孝洞金儒王振」・「濯耳張儒元涉」などと居住地も記されており、洪原各地の洞名がみえる。姓氏も多様であり、この南原齋は特定の洞、特定の姓氏集団に属するものではなかった。

12月27日には南山齋で冠生・童生が集まって講会が開かれ、朴始淳もその様子を見学している。講長の前で学んだことを誦じ、冠生は翌年の居接の計画をたて、童子は褒美の食べ物をもっている。甲午7月3日には、くわしい内容は不明ながら「老人会」が南山齋で開かれている。

さらに4月24日には晩成齋において南山・晩成両齋が合同で郷飲礼（郷飲酒礼）をとりおこなった⁽¹⁵⁾。老少章甫（儒生）が集まり、前出の金基勉が主人に、齋儒たちが賓になって儀礼が進行した。県監辺錫胤とともに見学した朴始淳は、この晩成齋での郷飲礼を「聖世の美俗、先師の遺教」であり「京師から千里離れたこの地において、弓馬の旧習が一変し礼俗をたつとぶようになった」と歎賞している⁽¹⁶⁾。

『北征日記』には南山齋・晩成齋のほかにも観善齋、州南齋、道南齋および養士齋といった「齋」が登場する。このうち養士齋は18世紀ころから郷校の教育的機能の衰退に対応して全国各地にうまれた公設に近い性格の機構で、洪原では県監が主導して正祖2年（1778）に創設されたと伝えられる⁽¹⁷⁾。そのほかの齋は私設のものであるが、朴寅和の『洪城誌』には、養士齋・南山齋・晩成齋など15の齋をあげて、「みなこれらは一邑の士が共通して居接（寄宿）する齋」であるという記載がある（学校条）。洪原の儒生に広く開かれていたということなのであろう。さらに、『洪城誌』はつづけて、

その他の里塾・閭閻（村校）では各々その洞の童子に教え（儒生に）居接させているが、

(15) 儒教的郷村教化儀礼である郷飲酒礼について、朝鮮に即しては平木実（1999）の研究がある。

(16) 『日記』甲午4月24日。ちなみに、朴始淳は5月20日から7月7日まで、晩成齋を居所とした。

是日南山・晩成両齋合設郷飲礼於晩成齋。……真聖世之美俗、先師之遺教、而況茲士去京師千里、一變弓馬之旧習、而敦尚礼俗、令人艶欽。与主倅歎賞良久。

(17) 『洪城誌』四、学校。咸鏡道の養士齋については姜大敏（2018：第3章）がくわしい。

(このような齋が) ない村はない。山峡の中、津の辺りであってもそうである。昔日の弓馬の郷が一変して魯(孔子の生国)になったといえる。

と記している⁽¹⁸⁾。洪原には南山齋のように村落を越えて県内の儒士があつまる「齋」が存在する一方で、村落レベルの童子が通う里塾(書齋・書堂)も普及していたのである。丁若鏞は『牧民心書』のなかで「おおよそ四、五村に必ず一つの書齋があり、齋には一夫子が坐して都都平丈、児童数十人を教える」と地方村落の姿を描いているが⁽¹⁹⁾、19世紀末葉の洪原も類似した状況だったようである。

『洪城誌』によると、こうした齋は齋生が学ぶ学齋というだけでなく、その齋に関係の深い人物を祀り祭祀をおこなう場でもあった⁽²⁰⁾。そもそも、南山齋は洪原に流配されていた前弘文館副修撰の尹致謙を追慕して洪原の儒生たちが純祖18年(1818)に創建したもので、春に尹致謙を祀り、秋には洪原の学者朴亨求を祀った。朴亨求(純祖7～高宗16、1807～1879)の本貫は密陽、思山と号した。『洪城誌』は南山齋について「思山朴公亨求興学の所」と述べている。郷飲礼も朴亨求が主導してはじめたようである⁽²¹⁾。朴始淳は、朴亨求の息子柱からその父が「北土の学を倡えた」人物であったという評を聞いている(『日記』癸巳9月28日)。

晩成齋の創建時期は明確でないが、1928年刊の『洪原郡誌』には、春に峒雲李公敦夏を祀り、秋に南山齋と同じく思山朴公亨求を祀ったとある⁽²²⁾。李敦夏は高宗23年(1886)から高宗25年(1888)にかけて咸鏡道觀察使だった人物である⁽²³⁾。朴始淳は晩成齋の齋門と中堂に李敦夏から与えられた額が掲げられていると記しており、晩成齋の創建は李敦夏の咸鏡道觀察使在任中だったのであろう。

このように南山齋・晩成齋ともに創建はあたらしく、洪原における齋の普及、ひいては儒士的活動の活発化は19世紀に入ってからであったとみられる⁽²⁴⁾。朴始淳の『日記』に「弓馬の旧習が一変し礼俗をたつとぶようになった」とあり、『洪城誌』は「昔日の弓馬の郷が

(18) 『洪城誌』四、学校。

右各齋、皆は一邑之士、通共居接之齋、而其他里塾閭閻之各自其洞養蒙居接者、又無村無之、雖峽中津辺亦然。昔日弓馬之郷、可謂一變而至魯矣。

(19) 『牧民心書』礼典六条、課芸。

郡県每一郷、領數十村。大約四五村、必有一書齋。齋坐一夫子、都都平丈、領児童数十人。

(20) 祭祀と学問を兼ねる場という性格は書院に通じるが、大院君政権期の書院撤廃以前においても洪原では正式に書院を名乗った施設はないようである。

(21) 『洪城誌』四、学校、南山齋、および『洪城誌』一、人物儒学、朴亨求。

(22) 『洪原郡誌』学校条、晩成齋。

(23) 『承政院日記』高宗23年5月3日乙未、高宗25年6月30日庚戌。

(24) 『洪城誌』四、学校条。『洪城誌』に載る齋のなかでは進脩齋の創建がもっとも古く、肅宗29年(1703)のことと伝えられているが、ほかの齋は判明する限りでは19世紀に入ってからのもが多いようである。

一変して魯（孔子の生国）になった」と述べていたが、そうした変化もさほど古くさかのぼるものではなかったようである。

2 武から文へ——儒士的世界の形成と姓氏集団

それでは、「弓馬の旧習」、「昔日の弓馬の郷」といった武的・武士的環境からの変化はどのように進んだのであろうか。この節では、武から文への変化を、その担い手としての姓氏集団（門中）に注目して検討してみよう。

『日記』にみえる「門中」のひとつに、壮元洞（壮元亭）の崔氏門中（本貫全州）がある。甲午4月13日、崔氏門中は祖先の墓のある先山の下で文会を開いた。門中の人びとが集まって詩を詠む宴だったようである。朴始淳も招かれて、林光洙とともに参加している。会の費用は門中で契をつくって庄土を置き、その土地からの収益をあてていたという。朴始淳はこの崔氏門中を「洪原の巨族」とよんでいる⁽²⁵⁾。

『日記』の文会に登場する崔氏門中の構成員に崔令中極、崔座首中求、崔校監恒鏞、崔初試庸煥などがある。崔令中極は高宗4年（1867）の進士で、咸鏡道永興にあった濬源殿の令（従六品職）をつとめたためか「崔令」とよばれている⁽²⁶⁾。晩成斎での郷飲礼にも名がみえる（『日記』甲午4月24日）。崔座首中求の「座首」は通例郷任の首座をさすが、この時期の現任の座首は別な人物

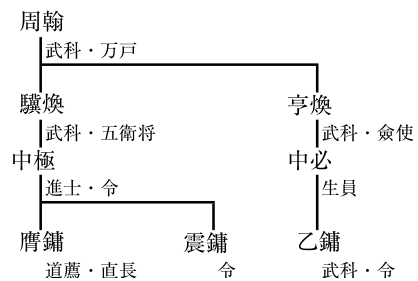


図1 進士崔中極の系譜（全州崔氏）

なので、以前座首だったのであろうか。崔校監恒鏞は洪原郷校の校監であろう。崔初試庸煥は前出南山斎の經学会に参加していた。いずれも、公的な職の経験者や儒士・儒生である。さらに『洪城誌』に探すと、崔中極の子、膺鏞は道薦で智陵（太祖の曾祖父の陵）の直長（従七品職）をつとめ、膺鏞の弟震鏞は徳陵（太祖の高祖父の陵）の令となった。崔中極の従弟中必は高宗19年（1882）の生員科に及第している⁽²⁷⁾。

このように19世紀末葉において崔氏門中は儒士の様相を示すのであるが、世代をさかのぼ

(25) 『日記』甲午4月13日。

壮元亭崔氏門中、以是日設文会於会林洞先山下……山下有一豎石、乃故進士崔希貞之墓碣也。是為崔氏之入北鼻祖、而子孫蕃衍為洪原巨族……今日之会、即門中之設楔、置庄所用下、而一年一会以為常、其來已久遠云。

(26) 『洪城誌』六、蓮社、蔭途。永興は太祖李成桂の故郷で、濬源殿に太祖の肖像画が奉安されていた。濬源殿のほか、咸鏡道には王家関係の陵も多く、こうした殿・陵の令・直長・参奉といった職には咸鏡道の儒士・儒生が任用された。

(27) 『洪城誌』六、蓮社。

ると武士的性格が強くなる（図1）。崔中極の父、崔驥煥は哲宗11年（1860）の武科及第者で五衛将（正三品職）に任じられた⁽²⁸⁾。驥煥の弟亨煥も武科に及第し咸鏡道潼関鎮の僉使（従三品職）となっている。驥煥・亨煥兄弟の父、中極の祖父周翰も純祖2年（1802）の武科及第者で井浦万戸（従四品職）をつとめた。そもそも崔氏集団の住む壮元洞（壮元亭）という洞名が武科に壮元及第した崔忠大（英祖29年武科、1753）に由来するという⁽²⁹⁾。武科及第者を出していた武士系家門から19世紀後半にいたり進士・生員など多くの儒士がでるようになったのである。

こうした変化は崔氏門中に特有な傾向というわけではない。『日記』に朴都正寅和として登場する『洪城誌』の編者朴寅和の一族、軍威朴氏の例をみてみよう。朴寅和は前出思山朴亨求の門下で、道薦により溶源殿の参奉・令となり、ついで咸鏡道の利原県監などをつとめ、高宗24年（1887）には敦寧府都正（正三品職）に任じられている⁽³⁰⁾。かれの兄寅義は哲宗10年（1859）の生員で、司憲府監察、咸鏡道鏡城府の判官などをつとめた⁽³¹⁾。寅義の子珽夏も鏡城府判官・敦寧府都正、その弟珪夏は高宗10年（1873）の進士、寅和の子珩夏は高宗22年（1885）の生員であった⁽³²⁾。文科及第者はいないものの、十分に儒士・士族とみなせる一族である。しかし、かれらもやはり武士の系譜につらなる⁽³³⁾。寅義・寅和兄弟の父朴秀連は純祖6年（1806）の生まれで、武科に及第し（年度不明）、西北僉使などをつとめた。秀連の高祖父必興は肅宗42年（1716）の武科及第者で、建功將軍（従三品西班階）であった。

朴寅和の師で南山齋において興学につとめ、南山・晩成両齋に祀られた前出朴亨求（本貫密陽）にしても、その父師燮は武科及第者であった⁽³⁴⁾。また、『日記』には南陽洪氏が多数登場するが、かれらも武士から儒士へと転換した一族であった（図2）。『洪城誌』が「洪氏譜」（洪氏族譜）によって述べるところによると、19世紀末洪原の南陽洪氏は洪得海という17世紀前半に没した武人の子孫であった。洪得海は武科に及第し宣武原従功臣だったというから、16世紀末の壬辰丁酉乱で功績をあげたのであろう⁽³⁵⁾。その子孫も武士が多く、純祖即位年（1800）生まれの洪理斗とその弟理勲とともに武科に及第し、理勲の子昇厚も武科に及第して慶興府使をつとめた。一方、理斗の子元厚は道薦で純陵参奉をつとめ、その弟秉厚

(28) 以下、崔驥煥・亨煥・周翰については『洪城誌』六、武班条による。

(29) 『洪城誌』六、武班。

(30) 『洪城誌』六、剡薦、『承政院日記』高宗16年6月25日丁卯、18年3月1日己亥、22年10月29日甲午、24年8月27日辛亥。

(31) 『洪城誌』六、蓮社、蔭途。

(32) 『洪城誌』六、蓮社、蔭途。

(33) 以下、朴秀連・必興については『洪城誌』六、武班条による。

(34) 『洪城誌』一、人物儒学、朴亨求、墓碣銘序。

(35) 『洪城誌』六、武班、洪遂績。宣武原従功臣号は壬辰丁酉乱で功績のあった者9,060人に宣祖38年（1605）贈られた（『宣祖実録』38年4月庚申）。以下、洪理斗・理勲・昇厚についても同武班条による。

は高宗7年（1870）の生員科に及第、高宗19年（1882）には異例ながら出身地洪原の県監に任じられ、その後同じ咸鏡道内の高原郡守をつとめた⁽³⁶⁾。武科及第の昇厚にしても、その孫思弼は『日記』に「洪初試思弼」・「洪儒思弼」として登場する。『日記』には「洪麻田万厚」とその子「洪進士和裕」もみえる。洪万厚は蔭官で京畿の麻田郡守をつとめたことがあった⁽³⁷⁾。

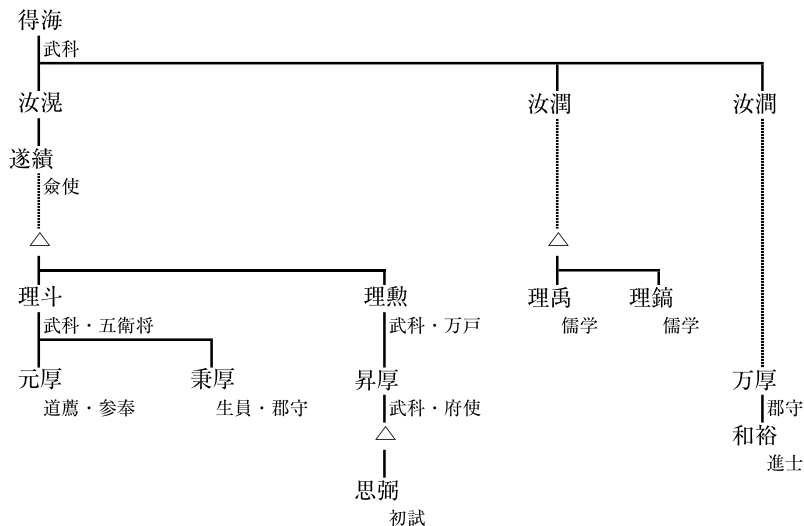


図2 洪原の南陽洪氏系譜

以上にみた洪原の儒士門中は19世紀に入って武から儒へと移行していた。19世紀末の『北征日記』の時点からみると「弓馬の郷」からの転換は最近のできごと、ないしは進行中の事態だったようである。儒教を学び官に仕え、自身を儒士・士族と任じていたであろう『洪城誌』の編者朴寅和にしても、かれの父は前述したように武科及第者であった。それもあつてか、『洪城誌』には文と武をともに重んじるべきことが述べられている。

弓矢を廃すべきでないのは、詩書を棄てるべきではないようなものである。弓矢を廃すべきでなければ、武士を養成し勸奨しないわけにはいかない。……（武士は）儒士と同等で、出入に際し特別に視ることはなく、ただ訓練（訓練庁・鍊武堂）に属して、校院（郷校・書院）に属さないだけである。朝家は武選（武科）を設けて人材を取って進仕させた。……選抜の方法は文士の方法と同じで、（試す）技が異なるだけである。文と武は同軌であり、同じように貴ぶべきなのである⁽³⁸⁾。

(36) 以下、洪元厚・秉厚・万厚・和裕については『洪城誌』六、蓮社条・蔭途条による。

(37) 『洪城誌』六、蔭途。

儒士・文士と武士とが明確には分化していなかったあらわれなのであろう。また、前掲崔氏門中の例で、武士・武官だった崔亨煥の息子中必は生員となったが、その息子乙鏞はふたび武科に及第している（図1）。一族が一斉に武を捨てたというわけではもちろんなく、状況は流動的だったようである。

3 富民と賑恤

『洪城誌』武班条にはあわせて62人の武班＝武士が載せられているが、その中には「武」とは異なる分野でも史料に名をのこしている者がいる。

張漢星は英祖30年（1754）の生まれで、武科に及第し、中嶺堡別將をつとめた。『洪城誌』武班条に載るひとりで、息子の鶴耆、甥の鶴齡も武科及第者であった。この張漢星が『洪城誌』の学校条には郷校移建費用の拠出者として登場する。

郷校は公設の学校であり、一般に朝鮮時代後期、その教育的機能は衰えるものの、郷校に置かれた文廟（大成殿）祭祀（稷饗）を中心に儒士・士族のネットワークの結節点のひとつであった。純祖11年（1811）3月、洪原では「士林」の公議により郷校の場所を移しあらたに建て直すことが決まった。ところが、その春は飢饉で移建費用を民から徴収することができず、県内の各面書齋に割りあてて錢200兩（鎰）を集めたが、まだ不足していた。このとき、張漢星と朴師顥のふたりが各々まず300兩、後に1,200兩の資金を出したので、新郷校の完成をみることもできた⁽³⁹⁾。張漢星家に伝わる「校宮董役記」によると、この貢献に対し「儒郷が僉議して、兩人を校案・郷案に入録し、姜兼齊が推薦して張漢星・朴師顥は工房郷所となり、また漢星の孫季源と師顥の子亨來も推薦されて校監となった」という⁽⁴⁰⁾。「校案」は郷校儒生の名簿（青衿案）であろう。「郷案」は通例郷員（在地士族）の名簿をいうが、ふたりが「工房郷所」（郷任の職）に就任したことから考えると、洪原ではこの「郷案」入録者から郷任が選ばれていたのであろうか。張漢星の孫と朴師顥の子が就いた「校監」は郷校

(38) 『洪城誌』六、武班。

弓矢不可廢、猶詩書不可棄也。弓矢不可廢、則武士不可不養不勸也。……与儒士等而出入不殊視、但属訓練、而不属校院。朝家亦設武選、取材進仕……選法与取文士法同、技異、是文武同軌、而同其貴也。

(39) 『洪城誌』四、学校（校規）条。

純廟辛未三月……是時士林公議移建校宮于東基……是年春大歛（歛）、万無歛民之道、不得已分排各面書齋、総得二百鎰、方為始役。五月二十日破屋、是日県之朴師顥・張漢星兩人、各出錢三百鎰、先構成大成殿……十月還安落成。是日張朴兩人又各出一千二百鎰、待春繼建堂宇齋室矣。……此見全性珏所記郷校移建事實記。

(40) 『洪城誌』四、学校（校規）条。

張漢星家校宮董役記曰……前後役費総三千数百兩、張朴兩人出力、儒郷僉議即録兩人于校案・郷案、姜兼齊薦張漢星・朴師顥為工房郷所、又薦漢星之孫季源、師顥之子亨來為校監。

の役職（校任）である。移建費用の拠出により、洪原の儒士として認められたわけである。なお、費用を出したもう一人の朴師顥（密陽朴氏）も武科及第者であった⁽⁴¹⁾。校任となった息子の朴亨来は生員科に及第している⁽⁴²⁾。

張漢星は中央編纂の史料にもあらわれる。『承政院日記』に載る咸鏡監司（觀察使）の報告によると、純祖23年（1823）2月、咸鏡道の飢饉に際し、「各邑富民」が錢穀を拠出し（それを地方官衙が）饑民に分給した。洪原では出身廉榮甲と前別將張漢星の名があげられており、張漢星は各種穀物50石を拠出し、別に「私救急」（私的な賑恤）として33石を分け、また大豆300石を廉価で発売した⁽⁴³⁾。張漢星は武科に及第し武官職に就いたというだけでなく、郷校の移建といった公共の事業を援助し、飢饉には賑恤につとめる「富民」だったのである。

上記記事に張漢星とともに名前のみえる廉榮甲も武科及第者（出身）で、憲宗3年（1837）にも賑恤のため錢1,000両・各穀183石などを拠出し、その褒賞で嘉義大夫（從二品）・龍驤衛護軍となっている⁽⁴⁴⁾。民の債務を肩代わり（蕩債）したことで、洪原各社（面）の民が廉榮甲への褒賞を県監に請願したこともあった⁽⁴⁵⁾。廉榮甲の父繼宗、祖父極大も武科及第者であり、やはり賑恤など公共の事業に拠出する富民であった。祖父極大は正祖24年（1800）に火災で罹災した民のために穀物90石余と錢317両を拠出し、純祖11年から12年（1811～12）の飢饉の時には民の還穀償還分4,100余石をかわって負担した⁽⁴⁶⁾。その功もあり、職は文城僉使、官階は崇政大夫（從一品）に至っている⁽⁴⁷⁾。また、洪原の郷射堂（郷任の庁舎）を移築したときには、その費用をかれが拠出した⁽⁴⁸⁾。榮甲の父繼宗も賑恤に400石を出した記録が残る⁽⁴⁹⁾。富裕な一族であり、武科に進出するとともに、賑恤などにつとめ、公的地位

(41) 『洪城誌』武班条に朴師顥の名はみえないが、朴亨来の司馬榜目の記事に「生父武及第師顥」とある（『崇禎四己卯式司馬榜目』。同榜目は以下の電子データによる。最終閲覧：2020年1月20日）。http://people.aks.ac.kr/front/imageView/imageViewer.aks?exmlId=EXM_SA_6JOc_1819_029394

(42) 『洪城誌』六、蓮社、前出『崇禎四己卯式司馬榜目』。また、この朴亨来は南山齋の創建費用の拠出者としても名前があらわれる（『洪城誌』四、学校、南山齋）。

(43) 『承政院日記』純祖23年2月13日癸丑。

觀此咸鏡監司李勉昇賑狀啓、則以為各邑富民、捐其錢穀、分給饑民之各穀五十石、錢一百兩以上馳啓、而其中八人、別施異典、以示獎勵……洪原出身廉榮甲補賑粟一百石、私救急錢四百十兩、前別將張漢星補賑各穀五十石、私救急三十三石、質太三百石廉價発売……

(44) 『承政院日記』憲宗3年8月27日壬申、『洪城誌』六、武班、廉榮甲。

(45) 『洪城訴牒題』奎章閣韓國學研究院藏。この史料は19世紀前半、洪原県監に提出された請願・訴訟の概要とそれに対する題辭を記したものとみられる。

各社民等、富人廉榮甲蕩債、請褒事。題、果如所訴則其惠民之心誠極嘉歎。然而此与賑恤有異……。

(46) 『日省録』正祖24年4月25日丁未、純祖13年3月2日己巳。

(47) 『承政院日記』純祖15年1月15日辛丑、『洪城誌』六、武班条。

(48) 『洪城誌』四、館廨条、郷射堂。

(49) 『承政院日記』純祖12年8月19日己未。

を上昇させていたようである。廉栄甲らの本貫は坡平で『洪城誌』武班条にはかれらを含め10人の坡平廉氏がみえるが、朴始淳が洪原にいたとき、坡平廉氏からはじめての進士及第者がでた⁽⁵⁰⁾。この廉氏にしても武から儒への志向があったようである。

こうした「富民」の経済的な基盤について『洪城誌』や『日記』に直接の記載はない。ただし、『洪城誌』には「貨殖」と題して、つぎのような記述がある。

北道（咸鏡道）は海に沿って山を背にしており、地は高燥で広野が少ない。土は瘠せ民は貧しく農業に適していない。村で家を興そうとする者はただ末業（商業）に従事するしかない。貨殖を重んじ、富商を以て有力な家（家数）とみなす。洪原は魚塩の利において南海に通じ、元山に近く、古から富邑と称された⁽⁵¹⁾。

咸鏡道は農業に適していないため、貨殖を重んじて富商の地位が高く、なかでも洪原は南海（朝鮮南部）との交易で魚塩の利をえて、富邑と称されたというのである⁽⁵²⁾。「魚塩の利」に関連して、朴始淳は漁のようすを見物した日の『日記』に、洪原の「邑村豪富」が多くの財を出して漁船を所有する「財主」となっていると記している。多い者は十余艘、少ない者でも三艘を下らないという⁽⁵³⁾。「邑村豪富」とは、邑（官衙のある邑治・邑城）および村落の富民ということであろう。また、かれは海岸での製塩の模様も観察しており、「関北（咸鏡道）の魚塩の豊かさは、洪原が最もすぐれている」と述べている⁽⁵⁴⁾。洪原における富の基盤のひとつは漁業と製塩、およびその交易だったようである。

武士から儒士へと転換し、あるいは賑恤に尽力して名声をえた洪原の有力者層のなかには、こうした「富商」も含まれていたとみられる。前出南陽洪氏の一族に洪理鎬という人物がいる。『洪城誌』では「儒学」条にあげられている学者である。ところが、この洪理鎬は、当初、親の命で貨販に従事していたという。

(50) 『日記』甲午4月27日、『洪城誌』六、蓮社。

(51) 『洪城誌』六、貨殖。

北道、沿海背山、地高燥、少広野、土瘠、民貧、無農、村以起家惟事末業、以貨殖相雄、以富商為家数。而洪原於魚塩之利尤通南海、近元山、自古称富邑。

(52) 朝鮮時代後期の咸鏡道の商業、交易については高丞禧（2003）がくわしい。

(53) 『日記』癸巳11月13日。

北人捕魚之具有三、曰拳網、曰網缸、曰釣船……邑村豪富率多出財、而任人治具、多者至十余艘、少者亦不下数三艘、是謂之財主也。

(54) 『日記』甲午4月7日。

觀煮塩草舎、津人耕渴鹵之地、而鋪土曝乾、則塩花生、澆之以水、熬以土鼎、多為数十処、関北魚塩之饒、洪原為最也。

北俗（咸鏡道の習俗）では多くの者が貨販によって暮らしており、君（洪理鎬）もまた嘗て親命によって商売に従事し珍奇なものをあつかっていたが……既にして商売を棄て、慨然として学に志した⁽⁵⁵⁾。

朴始淳を自身の家に迎えた林光洙も、元は商業に従事していたようである。朴始淳は林光洙の家に移った日の『日記』に、林光洙についてつぎのように記している。

林令は人となりが端正・謹飭である。はじめは貧しく、中年に及び財産を築いたが、遂に謀利の事に意を絶ち、心を窮貧の賑恤に留め、飢饉の年にあたっては賑救につとめた。邑治の残民が離散せずにすんだのは林令の恵みであるところが大きい。晩年になって学を好み、机の上に常に小学・性理などの書を置いて、手から離さず口に恒に誦えている。……好善樂義の士といえる。今の世にあって古の人ようである⁽⁵⁶⁾。

謀利（商売）によって財産を築き、飢饉には賑恤につとめ、晩年になって学問を好んだという。高宗25年（1888）、司憲府監察となり、日を置かず敦寧府都正に任じられているのも⁽⁵⁷⁾、賑恤の功によるのであろう。『洪城誌』でとりあげられている文科、生員・進士、蔭官、武班などに林氏はほとんどおらず、19世紀末葉の洪原において林氏が有力な一族であったようにはみえない。しかしながら、林光洙は『日記』のなかで洪原の儒士たちが開いた宴の多くに朴始淳とともに同席し、晩成齋での郷飲礼にも参加していた。儒士として認められていたといつてよいであろう。

こうしてみると、洪原の儒士たちの世界の閉鎖性は弱く、武士とは連続的であり、また、商業に従事していた者が賑恤や公的建築費用の負担といった慈善的活動をつうじて、あるいは学問によって社会的地位を上昇させ、儒士の世界に参入することも可能だったようである。一方では、富民の慈善的活動によって不安定な地方社会の基盤がささえられ、同時にその富民を儒士のなかに取りこんでいくことによって社会秩序が維持されていたとみることもできよう。

(55) 『洪城誌』一、儒学、洪理鎬。

行状曰……北俗多居貨販遷、君亦嘗以親命遂什一操奇贏……既而棄之、慨然有志於学。

(56) 『日記』癸巳12月12日。

林令為人端正謹飭。早而貧窶、年及中、身能致財産。遂絶意於謀利等事、留心於窮窮恤貧、值荒歲而傾困賑救、使邑底殘民不至此離者林令之恵為多。晩而好学、案上常留小学性理等書、手不釈而口恒誦……是可謂好善樂義之士。而居今世而為古之人也。

(57) 『承政院日記』高宗25年6月7日丁亥、6月14日甲午。

おわりに

ここまで朴始淳の『北征日記』と朴寅和の『洪城誌』によりながら、19世紀末葉、甲午改革がはじまる直前の時期の咸鏡道洪原県の社会秩序について検討してきた。

このころの洪原では学齋が村落に普及し、そこで学び儒教的教養を身につけ科挙応試をめざす儒士・儒生の層が形成されていた。かれらのなかには科挙（文科、生員・進士）に及第し、あるいは道薦などにより文官職につく者もあらわれていた。また、齋では郷飲礼がおこなわれ、門中が主催して文会が開かれるなど、儒教的秩序とでもいえるべき世界が展開していた。

しかしながら、このような儒士の世界が形成されたのは19世紀に入ってからのものであったとみられる。『日記』に登場する南山齋は19世紀前半、晩成齋は19世紀後半になって創建されたものであったし、武科及第者を出していた武士系の家門から文官職就任者や生員・進士及第者があらわれるのも19世紀後半の例がめだつ。武士と儒士とは系譜の上で連続的であり、まずは武科に進出した在地有力者層から19世紀に入って儒士へと転換していく例が生まれていたのである。

このような武士・儒士層のなかには飢饉に際して賑恤につとめ、あるいは郷校など公的施設の建築費用を拠出するといった活動に尽力する富民もいた。洪原の富民の経済的基盤のひとつは「魚塩の利」であり商業であったが、そうした層の人びとが富を背景に武士・儒士となり、あるいは慈善的活動をつうじて官職など公的な恩賞や社会的な名望を獲得していくという傾向も存在した。

洪原の儒士層の閉鎖性・排他性は弱く、武士・儒士・富民が重なりあう、比較的柔軟な構造が存在していたようにみえる。また、そうした柔軟な構造によって、当時の不安定な地方社会の生活基盤が支えられ、社会秩序が維持されていたともいえよう。

もちろん、19世紀末の洪原が社会内部の軋轢、紛争と無縁であったわけでは当然ない『洪城誌』は、朴始淳のいた甲午3月に県監として洪原に赴任した辺錫胤について、乙未年(1895)に「民擾」により解任されたと記している⁽⁵⁸⁾。「民擾」の内容は不明であるが、19世紀末以降、咸鏡道のほかの地域でもさまざまな紛争が生じている⁽⁵⁹⁾。そうした紛争の局面から洪原の社会秩序を再検討する作業もあわせておこなう必要があり、前出の『洪城訴牒謄題』など、興味深い史料も残るのであるが、これについてはまた別な機会にとりあげることにしたい。

(58) 『洪城誌』六、官案、辺錫胤。

甲午来、乙未遁。泳孝党与云……錫胤遭民擾去。

(59) たとえば、田川(1975a)が19世紀末の咸興など咸鏡道士族の地方新制度に反対する請願運動にふれ、イ・ジョンジュ(2013)は咸鏡道北青郡の新式戸籍の分析とあわせて、20世紀初頭の同地域における募兵をめぐる民擾をあつかっている。

参考文献

【史料】（『承政院日記』など周知のものは省いた。）

『洪原郡誌』 洪原郡郷校、1928年刊。影印：『韓國近代邑誌』58、韓国人文科学院、1998年

「洪原県誌」『閔北誌』（国立中央図書館蔵）所収。影印：『朝鮮時代私撰邑誌』40、韓国人文科学院、1990年

『洪城誌』 国立中央図書館蔵、6冊

『洪城訴牒謄題』 ソウル大学校奎章閣韓国学研究院蔵

『北征日記』 翻刻：『韓末官人朴始淳日記』韓国精神文化研究院、1999年（甲午4月～7月分収録）、『韓末官人朴始淳日記2』韓国精神文化研究院、2003年（癸巳8月～甲午3月分収録）

【研究文献】

イ・ジョンジュ（이정주）

2013 「1901년 작성 北青戸籍과 北青郡民 소요 사건（1901年作成北青戸籍と北青郡民騒擾事件）」『韓国史学報』53

姜錫和 1996 「18세기 함경도지역의 개발과 사족（18世紀咸鏡道地域の開発と士族）」『歴史批評』35

2000 『조선후기 함경도와 북방영토의식（朝鮮後期咸鏡道と北方領土意識）』경세원

姜大敏 1994 「北道地方의 養士機構에 관한 小考（北道地方の養士機構に関する小考）」『精神文化研究』57

2018 『조선후기 향교 사론（朝鮮後期郷校史論）』国学資料院

金仁杰 2017 『조선후기 향촌사회 지배구조의 변동（朝鮮後期郷村社会支配構造の變動）』景仁文化社

高丞嬉 2003 『조선후기 함경도 상업연구（朝鮮後期咸鏡道商業研究）』国学資料院

全旻穆 2002 「朝鮮末期 어느 饒戸富民家の 身分上昇을 위한 노력（朝鮮末期ある饒戸富民家の身分上昇のための努力）」『湖南文化研究』31

田川孝三 1944 「近代北鮮農村社会と流民問題」朝鮮史編修会編『近代朝鮮史研究』（朝鮮史編修会研究彙纂、第1輯）朝鮮総督府

1972 「郷案について」『山本博士還暦記念東洋史論叢』山川出版社

1975a「郷憲と憲目」『鈴木俊先生古稀記念東洋史論叢』山川出版社

1975b「李朝の郷規について（一）」『朝鮮学報』76

1976 「李朝の郷規について（二）」『朝鮮学報』78

平木実 1999 「朝鮮時代の郷村における儒教的教化の一側面－郷飲酒儀礼・郷射儀

礼について」『天理大学学報』50-2（同著『朝鮮社会文化史研究Ⅱ』
国書刊行会、2001年に収録）

山内民博 2012 「朝鮮新式戸籍関連資料の基礎的検討（2）—建陽元年咸鏡南道端川
郡新湍面戸籍—」『資料学研究』9

* 本研究はJSPS科研費17K03127、18H03585の助成を受けたものである。